

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

オランダ ロッテルダム日本人学校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦労した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

- 本校は小学部20人、中学部6名、総勢26名（5/27現在）の小規模校。
- 児童生徒は学年分け隔てなく仲が良く、よく学び、よく遊び、保護者の学校教育への理解と協力のもと、伸び伸びと学んでいる。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- オランダは都市機能そのものはロックダウンにまでは至っていないものの、店舗の利用、人の集まりなどが厳しく制限されている。
- COVID-19が猛威を振るう西ヨーロッパ諸国の中では、比較的落ち着いた状況であるものの、予断を許さない緊迫した雰囲気包まれている。

オランダ人口：約1700万人

感染者：45,769人（前日比+133人）、

病院収容者：11,690人（同+8人）、

死亡者： 5,830人（同+8人）、（5月27日発表）

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯

- 日本人学校は所在地の国が定める公衆衛生上の指針を遵守することが求められる。本校もオランダ政府の決定に従い休校措置を取らなければならず、その為、児童生徒の学習保障の必要性が生まれた。
 - 同時に我々は現地校にはない問題にも対応策を迫られることになる。それは、令和2年度赴任教諭の派遣見合わせである。ただでさえ日本国内の学校に比べて教員充足率が低い日本人学校において、新派遣が行われる時期のパンデミックは大きな痛手であった。
⇒ その結果、複式学級3つを含む、全6学級のうち4学級で学級担任不在という状態で新学期のスタートを切ることを余儀なくされた。
 - ・ 休校措置に伴う児童生徒の学びの保障
・ 赴任教諭の派遣の見合わせによる教師数の不足
- 以上の2点が、我々がCOVID-19の対応を講じなければいけなくなった経緯となる。

④ 実際の取り組み

(1) 休校措置の段階的解除後の教育活動

- オランダ政府は3月16日に4月6日までの休校措置を発表後、何度か措置の修正を重ね、結果、5月11日からの小学校再開、6月2日からの中学校再開を決定した。
- そして、ここには『休校解除後は従来の授業数の50%の実施』との条件が添えられた。
- この決定に従い、『本校がどのように児童生徒の学習を保障していくのか』、また、『在ロッテルダムの少ない教職員数でどのように教育にあたるか』について繰り返し検討を重ね、次に示す5段階に分けて学校を再開するようにした。
- また、検討にあたっては大学・研究所などのICT教育の専門家より助言・指導を受けたり、日本の先駆け的实践を参考にしたりしながら、計画立案を進めた。

I. 入学式予定日まで（4月1日（水）～4月21日（火））

- 本来は入学式が行われるはずであった4月21日まで、この時期に今後も長引く休校措置に対応するべく、遠隔授業の準備を進めた。
- ツールとして遠隔会議ソフト『Zoom』を活用することを決め、情報担当教諭がきめ細やかに準備を進め、基本操作、使用上の注意点などを全職員で入念に共有し、後に備えることにした。
- また、校内の一方通行化、水道やトイレの場所制限など、休校解除後の感染リスク低減への準備も進めた。

Ⅱ. 小学部休校解除まで（4月22日（水）～5月8日（金））

登校日	月	火	水	木	金
小学部	遠隔会議ソフト『Zoom』を利用した遠隔授業（午前中のみ） 小学部：算数・国語・外国語活動を中心 中学部：5教科を中心				
中学部					

- 完全休校期間中に、派遣見合わせとなった赴任予定の先生方にも協力を得て、遠隔授業を行うこととした。
- 教師が児童生徒の個性や学習状況を的確に把握してこそ、充実した授業が実践できることを考えると、日本に待機中の教諭にとっては、まだ会ったこともない児童生徒と画面越しに相對するのは想像以上の困難さがある。
- 教師と生徒に必要な信頼関係を構築しつつ、学習をサポートするという困難な作業を厭わず、どの職員も「学校のため」「児童生徒のため」と慣れない遠隔授業に取り組んだ。

Ⅲ. 小学部再開後～中学部休校解除まで（5月11日（月）～6月1日（月））

登校日		月	火	水	木	金
小学部	1 ～ 3 年生	午前 登校授業	午前 遠隔授業	Zoom 学活 2時間	午前 登校授業	午前 遠隔授業
	4 ～ 6 年生	午前 遠隔授業	午前 登校授業		午前 遠隔授業	午前 登校授業
中学部		5教科を中心にした 午前遠隔授業			5教科を中心とした 午前遠隔授業	

- 小学校が休校解除後に求められたのは、『従来の授業数の50%での再開』だった。
- これは教員数が圧倒的に不足する本校にとっては、皮肉ながら状況打開の追い風となり、小学部を1～3年、4～6年の2グループに分けて隔日登校を実施することにした。

- このねらいは、休校措置解除後の以下の3つの課題に対応してのもの。
 1. オランダ政府の要請する50%の授業数という課題に対し、隔日登校で対応すること。
 2. 感染リスク低減という課題に対し、児童数の半分しか校舎にいない状況をつくり、密状態を回避すること。
 3. 授業を行える教員数の圧倒的不足という課題に対し、2つのグループが交互に登校することで、在蘭教師の数と授業のコマ数を調整すること。
- 尚、登校をしない日については、日本待機の教師による遠隔授業の実施し、児童の学習の機会を保障した。
- 中学部では水曜以外の4日間で5教科を中心に遠隔授業を進め、小中共通で水曜日に2時間の遠隔による学活を仕組んだ。ここで宿泊研修の学習や計画、クラス独自の取り組みを行った。

IV. 中学部休校解除後～通常運転開始まで（6月2日（火）以降）

登校日		月	火	水	木	金
小学部	1 ～ 3 年生	午前 登校授業	午前 遠隔授業	Zoom 学活 2時間	午前 遠隔授業	午前 遠隔授業
	4 ～ 6 年生	午前 遠隔授業	午前 登校授業		午前 遠隔授業	午前 遠隔授業
中学部		5教科を中心にした 午前遠隔授業				午前 登校授業

- 登校するグループを小学部1～3年、4～6年、中学部の3つに分け、それぞれ週に1日の午前授業とした。
- そして残りの4日間は午前中の遠隔授業を行うこととし、実際に現場で授業ができる在蘭教員組は対面での授業を中心に行い、派遣待機組は遠隔授業を中心に行っていくものとした。

V. 通常運転に戻ってから（未定）

- オランダ政府が示した指針では、従来通りの授業数での学校再開については小学校が6月8日より、中学校についても状況を見極めて早期に行われると発表。
- しかし、我々はその通常運転に戻ることができない。なぜなら、学校で実際に児童生徒を迎える教諭が6名ということを見ると、9学年への対応は不可能で、我々はIVで示した方策を継続せざるを得ないからである。
- つまりここから先、いつ通常に学校が運営されるかは、いつ文科省が新赴任教諭を派遣するかにかかっている状態である。

(2) 生徒・保護者の反応

- オンラインでの授業は、児童生徒・教員・保護者、皆初めてでしたので不安はありましたが、先生方が入念な事前打合せをしてくださっており、大きな混乱もなく開始することができました。

日本から着任予定の先生が来られず、初対面がオンラインとなり、子供たちも最初は戸惑ったと思います。

当初は保護者も子供たちの横につきっきりでしたが、今ではログインから授業の終了まで子供たちだけで出来ています。

先生方も、オンライン授業のために普段以上に準備や工夫をしてくださっていることが分かります。

もちろん対面授業に越したことはないですが、現状できる範囲としては最善策が取られていると感じています。(PTA会長)

⑤ 苦労した（している）こと

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 前代未聞の事態に、検討と試行錯誤を繰り返して、前例のない対応を数多くしなければいけなかったこと。人的にも物的にも様々な制限がある中、その条件を満たしつつ策を講じなければならず、また数日で状況がガラリと変わることに臨機応変さも求められ、神経をすり減らす毎日。
- しかし、遠隔授業で画面越しに子どもたちの笑顔を見られた時、何より、こどもの声が校舎に帰ってきた時に、我々は大きな喜びを感じた。
- また、学校と保護者という両輪で児童生徒を支えることができていることにも人の繋がり、絆を感じる。

⑦ 今後への課題

- 学校が完全に再開された後、これまで遅れた学習内容をどのように挽回するかというのが、本校のみならず教育界の喫緊の課題である。
- 本校はその1つの道筋として、現在、教育先進国のオランダで発達し、世界でも注目を集める『イエナプラン』にヒントを見出そうと、イエナプラン教育の第一人者を講師に招いてオンライン研修に取り組んでいる。
- まだそれは具体的な形として生まれる前の胎動を感じる程度の試みではあるが、職員が一体となってこの理念や方策に触れることによって、今の苦境に対応すると共に、休校解除後も児童生徒が主体的に学ぶことができる道を模索している。
- 有史以来、人類は多くの疫病の脅威に晒されてきた。しかし先人たちは疫病を制圧する度に、その先により優れた社会システムを構築してきたのである。

- ペストは結果として欧州における農奴解放に繋がり、コレラは上下水道の整備の呼び水となった。我が国、日本でも、かつて都に蔓延する天然痘に苦しむ民のために作られた奈良の大仏は、今や国を代表する文化財となった。
- 現代に入り、初めてのパンデミック。未だ、コロナに苦しむ方々が多く存在し、第2波、第3波への警戒も続く中、コロナ禍後の未来を語るのは時期尚早かもしれない。
- しかし、我々が「児童生徒のために」という、教育に携わる者としての矜持と自己研鑽を忘れなければ、そう遠くない未来、教育界は今よりも優れた教育システムを再構築できるものと信じている。
- 困難に立ち向かい、乗り越えようとする大人の背中を見せることこそ、子どもたちへの教育であるという思いを胸に、ロッテルダム日本人学校は職員一丸となってこの苦境を乗り越える。
- 在欧州の小さな日本人学校で起きているこの動きは、今、そして未来の日本の教育に確かな一石を投じている。